

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 30 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20720018

研究課題名（和文） ジャック・デリダの思想とデモクラシー概念の拡張

研究課題名（英文） The Philosophy of Jacques Derrida and the Transformation of the Concept of Democracy

研究代表者

佐藤 吉幸（SATO YOSHIYUKI）

筑波大学・人文社会系・講師

研究者番号：90420075

研究成果の概要（和文）：1990 年代以降のジャック・デリダの思想について研究し、彼が「来るべきデモクラシー」という概念を通じてデモクラシー概念をどのように変容したかを明らかにした。デリダは、権力の「残虐性」を変容させるような実践として、贈与、歓待、赦しという戦略を提示している。私たちは、そうしたデリダ的実践の可能性を明確化するために、『権力と抵抗』、『新自由主義と権力』、『民主主義の自己免疫とその反転』などを刊行した。

研究成果の概要（英文）：We researched the philosophy of Jacques Derrida after the 1990s and clarified the transformation of the concept of democracy through his notion of “democracy to come”. Derrida presented the strategies of gift, hospitality, and forgiveness as the practices to transform the “cruelty” of the power. To clarify the possibilities of these Derridian practices, we published *Power and Resistance*, *Neoliberalism and Power*, “Auto-immunity of Democracy and its reversal”, etc.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総 計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：デリダ、来るべきデモクラシー、国家権力の残虐性、贈与、歓待、赦し

1. 研究開始当初の背景

日本におけるジャック・デリダの哲学の研究は、これまで、初期における伝統的哲学テキストの脱構築について、中期における哲学的かつ文学的な脱構築実践についての研究を中心としてきたため、後期の政治的な脱構築実践、とりわけ「来るべきデモクラシー」概念についてはあまり研究されてこなかった。本研究は、後期デリダの政治的な脱構築

実践について、とりわけ「来るべきデモクラシー」概念を通じたデモクラシー概念の変容について論じる。

2. 研究の目的

ジャック・デリダの思想、とりわけ 1990 年代以降の彼の思想における、デモクラシー概念の変容について研究する。デリダは 1990 年代から、「脱構築は正義である」として「来

るべきデモクラシー」という概念を提示し、国家権力の「残虐性」を変容させるような実践として、贈与、歓待、赦しという戦略を提示した。そのような思想に基づいて、現在のデモクラシーがどのような形に変容されるかを探求することが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

具体的には、デリダの1990年代の政治的テキスト、とりわけ『友愛のポリティクス』、『法の力』、『ならず者たち』を読解するとともに、その問題系と関連する、バリバル、マルクスなどのテキストを分析した。また、デリダの『友愛のポリティクス』、『法の力』と、カール・シュミット『政治的なものの概念』、『独裁』、『政治神学』を並行的に読解しつつ、新自由主義＝新保守主義の時代における「例外状態の常態化」（ベンヤミン／アガンベン）という事態について検討した。また、『ならず者たち』における国家の残虐性に関する考察を、フロイト的な「死の欲動」概念とともに検討した。

4. 研究成果

デリダとベンヤミンによれば、現代的な権力の特徴は、法措定の暴力と法維持的暴力との分離の「停止＝止揚」であって、その際に法措定の暴力は法維持的暴力によって「反復されている」。これが意味するのは、グローバリゼーションに伴う「セキュリティ」への関心の増大に伴って、現代の主権権力が、既存の法律の適用にとどまらず、しばしば行政命令という非立法的手段を通じて法律を「発明」し、セキュリティの確保を図ろうとする、という事態である。こうした「例外状態の常態化」という統治パラダイムの実例を、ジョージ・W・ブッシュ政権下のアメリカ合衆国における対テロ政策、また、サルコジ政権下のフランス共和国における、2005年に起きた郊外での暴動への対抗措置に見出すことができる。こうした事態は、シュミットの概念を用いれば、敵＝異質者を排除するための「委任独裁」の常態化に相当する。デリダが「友愛のポリティクス」や「歓待」といった概念を提唱しているのは、新自由主義＝新保守主義の時代におけるこのような「例外状態の常態化」という事態に対してなのである。

こうした観点に基づいて、新自由主義＝新保守主義時代の権力メカニズムを考察し、それを『新自由主義と権力』にまとめた。また、ポスト構造主義の権力理論に関するより幅広い分析を『権力と抵抗』にまとめた。また、表象文化論学会第六回大会において、「デリダと来るべきデモクラシーの問い」というパネルを宮崎裕助氏（新潟大学）、長坂真澄氏

（京都大学大学院）と共同で組織し、その成果を学会誌『表象』に「民主主義の自己免疫とその反転」として発表した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計13件）

1) 佐藤嘉幸、「民主主義の自己免疫とその反転——デリダにおける残虐性なき死の欲動をめぐる」、『表象』06号、2012年、111-124頁。査読有。

2) 佐藤嘉幸、「柄谷行人と新たなマルクスの哲学——『マルクスその可能性の中心』を再読する」、『思想』第1044号、岩波書店、2011年、173-186頁。査読有。

3) 佐藤嘉幸、「新自由主義と権力——フーコーから現在性の哲学へ」（『新自由主義と権力——フーコーから現在性の哲学へ』第一章を改稿した韓国語版）、*Jaum gwa moeum*（『子音と母音』）、2010年夏号、1014-1045頁、査読有。

4) Yoshiyuki SATO, « 1968 au Japon et les nouvelles théories marxistes », Le site web EuroPhilosophie, 2010, URL:<http://europhilosophie.eu/recherche/IMG/pdf/Sato.pdf>、査読なし。

5) Yoshiyuki SATO, « Acte de résistance : les films de Straub-Huillet selon Deleuze », *Leucothéa*, n° 2, 2010, pp. 75-81. URL:<http://www.revue-leucothea.com/>、査読有。

6) 佐藤嘉幸、「レヴィ＝ストロースと「象徴的なもの」の生産」、『現代思想』第38巻1号、「特集＝レヴィ＝ストロース」、青土社、2010年、232-238頁。査読有。

7) 佐藤嘉幸、「結晶イメージに逃走線を引くこと——『時間イメージ』における反ベルクソン主義」、『思想』第1028号、岩波書店、2009年、193-209頁。査読有。

8) 佐藤嘉幸、「構造から構造の生成へ——レヴィ＝ストロースとポスト構造主義」、『表象』03号、2009年、108-121頁。査読有。

9) 佐藤嘉幸、「動的発生から生成変化へ——ドゥルーズ／ガタリにおける主体化と脱服従化」、『現代思想』第36巻15号、「特集＝ドゥルーズ」、青土社、2008年、228-239頁。査読有。

10) Yoshiyuki SATO, « Production de la précarité et de la fracture : Néolibéralisme selon Foucault », *La Rose de Personne*, n° 3, « Pouvoir destituant : les révoltes métropolitaines », 2008, pp. 135-142. 査読有。

11) 佐藤嘉幸、「「倫理」への転回」、ジュディス・バトラ『自分自身を説明すること』、月曜社、2008年、257-281頁。査読有。

1 2) Yoshiyuki SATO, « Duras avec Lacan : le regard et le désir dans Le Ravissement de Lol V. Stein », *Chemin faisant* (Revue franco-japonaise), n° 1, 2008, pp. 25-35; 「ラカンと共なるデュラス——『ロル・V・シュタインの歓喜』における眼差しと欲望」、『道行』(日仏二言語雑誌) 第1号、2008年、21-30頁。査読有。

1 3) 佐藤嘉幸、「生起から出来事へ——ハイデガーとドゥルーズにおける Ereignis/événement」、『文化交流論研究』第3号、2008年、1-9頁。査読有。

〔学会発表〕(計15件)

1) Yoshiyuki SATO, « L'enseignement sous le régime néolibéral », conférence au séminaire « L'université comme architecture (ir)rationnelle de la philosophie » (tenu par Yuji Nishiyama), Collège international de philosophie, Paris, le 29 mars 2012.

2) 佐藤嘉幸、「主体化＝服従化する禁止の法——バトラー『権力の心的な生』とアルチュセール、フーコー」、東京大学 UTCP における講演、東京大学駒場キャンパス、2012年2月27日。

3) 佐藤嘉幸、「規律的統治から新自由主義的統治へ——後期フーコーと権力の諸問題」、第10回新潟大学哲学セミナー、新潟大学、2011年11月25日。

4) 佐藤嘉幸、「脱構築と精神分析——「フロイトとエクリチュールの舞台」を読む」、講義「脱構築入門」(宮崎裕助担当)における講演、新潟大学人文学部、2011年11月25日。

5) 佐藤嘉幸、「いかに核エネルギー政策に服従しないか」(« Comment désobéir à la politique nucléaire ? »)、日仏シンポジウム「日仏両国における若者と不服従」(Symposium franco-japonais « Jeunesse et désobéissance en France et au Japon »)、日仏会館(東京)、2011年10月3日。

6) 佐藤嘉幸、「新自由主義的統治性とは何か——後期フーコーから出発して」、シンポジウム「ネオリベラリズムとグローバリゼーション」、日本社会学会第84回大会、関西大学千里山キャンパス、2011年9月18日。

7) 佐藤嘉幸、「民主主義の自己免疫とその反転——デリダにおける残虐性なき死の欲動をめぐる」、パネル「デリダと来たるべきデモクラシーの問い——『ならず者たち』をめぐる」、表象文化論学会第六回大会、京都大学、2011年7月3日。

8) Yoshiyuki SATO, « Du Capital à la philosophie de la reproduction : le matérialisme chez Althusser », communication au colloque international «

Les ontologies matérialistes et la politique », Université de Poitiers, le 3 décembre 2010.

9) 佐藤嘉幸、「経験的出来事と超越論的出来事——ドゥルーズと一九六八年五月」、セッション「一九六八年と出来事の哲学」、社会思想史学会第35回大会、神奈川大学、2010年10月23日。

1 0) Yoshiyuki SATO, « 1968 au Japon et les nouvelles théories marxistes », communication à la journée d'étude « Luttres subalternes, subjectivité critique et dissidence théorique » (dans le cadre du Stage EuroPhilosophie 2010 à l'ENS-Paris), Ecole Normale Supérieure, Paris (rue d'Ulm), le 14 avril 2010.

1 1) 佐藤嘉幸、「新自由主義の競争原理 人文学の無償性」、映画『哲学への権利』をめぐる西山雄二、トマ・ブリッソンとの討議、第18回現代語・現代文化フォーラム、筑波大学、2010年2月4日。

1 2) 佐藤嘉幸、「結晶イメージに逃走線を引くこと——『時間イメージ』における反ベルクソン主義」、セッション「ドゥルーズの逆説的保守主義」、表象文化論学会第四回大会、京都造形芸術大学、2009年7月5日。

1 3) 佐藤嘉幸、「規律権力から環境介入権力へ——フーコーと新自由主義」、セッション「生政治と抵抗——フーコー理論の現在と可能性を展望する」、社会思想史学会第33回大会、慶應義塾大学三田キャンパス、2008年10月25日。

1 4) Yoshiyuki SATO, « Surdétermination et devenir de la structure », communication à la journée d'étude « Pour Marx d'Althusser » (dans le cadre des activités du Centre International d'Étude de la Philosophie Française Contemporaine sur « Le moment philosophique des années 1960 en France »), École Normale Supérieure, Paris (rue d'Ulm), le 16 mai 2008.

1 5) Yoshiyuki SATO, « Le dernier Foucault et la transfiguration du sujet », conférence au séminaire « Agencements, dispositifs, performatifs : sexualité et genre » tenu par Monique David-Ménard, Université Paris VII, le 20 mars 2008.

〔図書〕(計4件)

1) 佐藤嘉幸、『新自由主義と権力——フーコーから現在性の哲学へ』、人文書院、2009年、200頁。

2) 佐藤嘉幸、『権力と抵抗——フーコー・ドゥルーズ・デリダ・アルチュセール』、人文書院、2008年、331頁。

3) 佐藤嘉幸、「フーコーによるネオリベラ

リズム——『生政治の誕生』をめぐって」、川那部保明編、『ノイズとダイアログの現場——市民社会の現場から』、筑波大学出版会、2008年、470-486頁。

4) 佐藤嘉幸、「器官なき身体から抵抗へ——『千のプラトー』における主体化と抵抗」、小泉義之・鈴木泉・檜垣立哉編、『ドゥルーズ／ガタリの現在』、平凡社、2008年、270-285頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 吉幸 (SATO YOSHIYUKI)

筑波大学・人文社会系・講師

研究者番号：90420075